「知」の結節点で

澤田四郎作

人・郷土・学問

奈良女子大学文学部なら学研究会

はじめに

澤田四郎作と奈良・大和

大和平野の西、二上山を仰ぐように葛城の田畑や家々が続きます。その一隅、五位堂（ごいどう）の造り酒屋（現在の澤田酒造）に澤田四郎作は生まれました。東京帝国大学医学部を卒業後、大阪で小児医院を営みながら民俗学研究に本格的に取り組みました。民俗学の泰斗・柳田国男の篤い信頼のもと、澤田は医院を研究者のために最大限開放し、近畿の民俗学研究の拠点、さらに近畿の研究者と全国の研究者が繋がる拠点としました。澤田の、近代科学的な実証性を重んじる姿勢、明白な事実や物的証拠など正確に資料化しようとする科学性は、次世代の多くの民俗学者を育てました。奈良県の民俗調査に関わった人々のほとんどは、大阪玉出の澤田医院を拠点とした近畿民俗学会のメンバーであり、奈良県の民俗学者の多くは澤田が育てたと言っても過言ではありません。また澤田自身が昭和 6 年（1931）に著した著作『ふるさと』は、五位堂に住む澤田の母に捧げられた作品であり、当時の葛城地域の言葉の貴重な資料として、大和研究の重要な一ページとなっています。

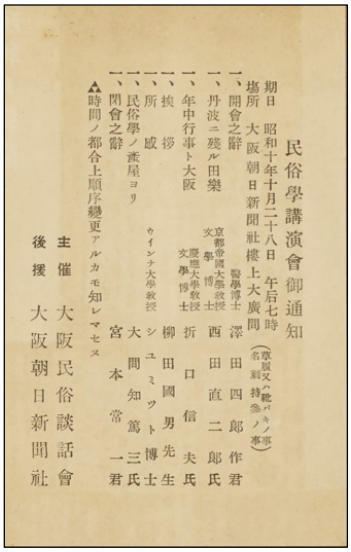
このたび、澤田四郎作を紹介するパンフレットを制作した動機は上でも触れた 2 点にあります。一つは、奈良県（民）が忘れてはならない郷土の偉大な文化人であったということです。先述の『ふるさと』はもちろん、大阪に居を構えてからも奈良との往来は頻繁で、奈良県に関してたくさんの著述を残し、また奈良県の郷土研究者の育成、親交は生涯続きました。民俗学者として全国的な著名人のひとりに名を連ねてからも、その温厚な人柄はまさに「大和の人」でした。

二つ目の動機は、その学際的な、文化コーディネーターのモデルとしての重要性です。民俗学だけでなく、澤田は、多様な領域の研究者や市井の人々をネットワークし、研究活動のマネジメントを行いました。大学を中心とした学問が専門分化しすぎて全体性を失ったという反省が聞かれ、学際性、大学と市井の人々の境界を超えるネットワークの重要性が指摘される今日、澤田の営みは、いまこそ再評価されるべきものでしょう。

奈良女子大学文学部なら学プロジェクト

本パンフレットを作成した奈良女子大学文学部なら学プロジェクトとは、平成 16 年（2004）に奈良女子大学文学部を推進母体として始まった学際的プロジェクトです。学内スタッフだけでなく、学外の研究者と交流し、「奈良・大和」を学ぶ人々のネットワーク拠点となることを目指してきました。なら学研究会はその中の研究部門で、奈良の研究者の足跡を再評価し、新しい観点からの研究の創発を図ろうとしています。澤田四郎作の研究もその一環です。

（寺岡伸悟）


民俗學講演會御通知

期日　昭和十年十月二十八日　午后七時
場所　大阪朝日新聞社樓上大廣間（雨天又ハ（記バキノ事）名刺到持參ノ事）

一、開會之辭　醫學博士　澤田四郎作君
一、丹波ニ殘ル田樂　京都帝國大學教授　文學博士　西田直二郎氏
一、年中行事ト大阪　慶應大學教授　文學博士　折口信夫氏
一、挨拶　柳田國男先生
一、所感　ウイシンナ大學教授　シュミット博士
一、民俗學ノ產屋ヨリ　大間知篤三氏
一、閉會之辭　宮本常一君

▲時間ノ都合上順序變更アルカモ知レマセヌ

主催　大阪民俗談話會
後援　大阪朝日新聞社

【1】昭和 10 年（1935）10 月に大阪朝日新聞社で行われた民俗学講演会の通知。柳田国男を関西の民俗学者たちが迎えた構図がよくわかる。澤田四郎作は開会の辞を述べている。

毎日新聞 国際情報 [世界の動き]
(昭25.2.1日)　2月1日号 旬刊　22

日本学界新風景
その十七
民俗學の巻

【2】昭和 25 年（1950）『毎日新聞国際情報 世界の動き』2 月 1 日号に掲載された当時の民俗学会の紹介。澤田のスクラップブックに残されていた。柳田国男を筆頭に、「現在なお研究生活を続けている大長老級の人々」の一人として澤田四郎作の名前があがっている。左ページの写真でも、柳田（12 名の写真の一番右上）の 2 つ下に澤田の写真が掲載されている。氏名の横に澤田が引いたと思われる赤線が残っている。

澤田四郎作略年譜・主要著作

略年譜

- 明治 32 年（1899）5 月 25 日
  奈良県北葛城郡香芝町五位堂（現・香芝市五位堂）に生まれる
- 大正 6 年（1917）3 月
  旧制郡山中学校 5 年卒業
- 大正 10 年（1921）3 月
  旧制第六高等学校第三部卒業
- 大正 15 年（1926）3 月
  東京帝国大学医学部卒業　7 月、同学部黴菌学教室副手に着任
- 昭和 2 年（1927）11 月
  砧村の柳田国男邸にはじめて訪問
- 昭和 6 年（1931）1 月
  医学博士号取得　学位論文「緑膿菌の色素産出に関する研究」
- 昭和 6 年（1931）7 月
  大阪市西成区玉出に小児科「澤田医院」を開業
- 昭和 9 年（1934）11 月
  大阪民俗談話会創設　会長に就任
- 昭和 11 年（1936）2 月
  近畿民俗学会創設　会長に就任
- 昭和 16 年（1941）7 月
  召集令により入隊　黒河省陸軍病院に勤務
- 昭和 20 年（1945）8 月
  終戦（陸軍軍医中尉）、シベリア抑留
- 昭和 22 年（1947）10 月
  帰国
- 昭和 24 年（1949）2 月
  『近畿民俗』復刊　中断していた近畿民俗学会は前年に例会が再開
- 昭和 28 年（1953）7 月
  大阪府文化財専門委員
- 昭和 30 年（1955）12 月
  財団法人日本民族学協会評議員
- 昭和 31 年（1956）11 月
  日本民俗学会理事
- 昭和 36 年（1961）5 月
  大阪府知事賞受賞
- 昭和 38 年（1963）11 月
  大阪市西成区保険功労者表彰
- 昭和 44 年（1969）11 月
  勲五等（双光旭日章）授与
- 昭和 46 年（1971）5 月 18 日
  死去

主要著作

- 『日本生殖器崇拝概論』、私家版、大正 10 年
- 『Phallus Kultus』1～15 号、謄写版、
  大正 13 年 4 月～大正 15 年 7 月
- 『性の表徴　無花果』、坂本書店、大正 15 年
- 『ふるさと』、私家版、昭和 6 年
- 『大和昔譚』、私家版、昭和 6 年
- 『五倍子雑筆』1～13 号、私家版、
  昭和 9 年 7 月～昭和 29 年 10 月
- 『山でのことを忘れたか』、創元社、昭和 44 年

※　没後、「澤田四郎作先生を偲ぶ会」編集発行
『澤田四郎作博士記念文集』、昭和 47 年
『澤田四郎作博士記念 民俗学論叢』、昭和 47 年

【3】澤田四郎作蔵書印各種。「五倍子」は澤田の号。漢方生薬（医）でもありインク（文）の材料でもあった「五倍子」に由来するか（医者と学問）。ほかに澤田には、「畔橋亭」、「二上行々子」、そして日夏耿之介より贈られた「贄川虔太郎」の筆名がある。

五位堂という環境

幼少期の思い出（民俗研究の原風景）

澤田四郎作は明治 32 年（1899）、奈良県北葛城郡五位堂村（現在の香芝市五位堂）で生まれました。五位堂は奈良盆地の西端に位置する集落で、村の西方には『万葉集』にも詠まれた二上山があります。またこの村は鋳物業が盛んだったことでも知られていて、村内の十二社神社には、鋳物師が奉納した珍しい鋳鉄の鳥居や灯籠があります。澤田家は、この地で天保元年（1830）創業という造り酒屋を営む村の旧家の一軒です。

澤田は四人兄弟の末っ子で、本人の述懐によると、小学校の二、三年の頃まで母の膝にのり乳を飲んでいたといいます。祖母にも大変可愛がられて、中学まで一緒に寝て『女大学』や『名所図会』を読み聞かされ、村の伝承や昔話を聞きながら眠ったといいます。また少年の頃の思い出として、二上山の夕景を眺めて「なにかしら物のあわれを覚えさせられて、小さな手を合わせて泣いた記憶がある」と記しています（澤田四郎作『山でのことを忘れたか』序文、p.459）。

古くから大和の人々が信仰する二上山を仰ぎ見る五位堂の地と、そこでの幼少期の記憶は、澤田が民俗学に惹かれ、これを生涯の学問として深めるうえで原風景となるものでした。

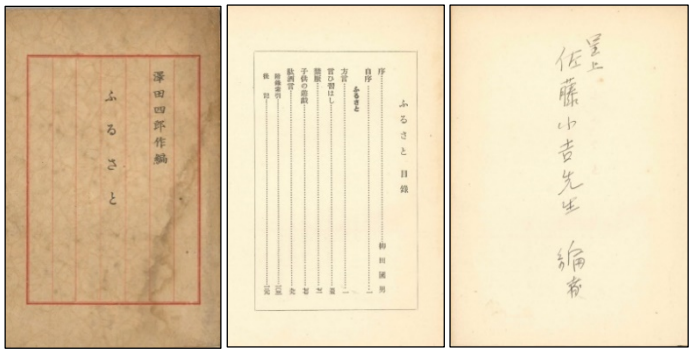
のちに澤田は、母の思い出として昭和 6 年（1931）に『ふるさと』を著します。また大阪で医院を開くにあたり、祖母から聞いた話しを中心に五位堂周辺の伝承を記した『大和昔譚』をまとめます。これらは単なる思い出の記ではなく、資料的価値が高いもので、特に柳田国男が序文を寄せた『ふるさと』は、生活のなかで使われてきた言葉や伝承を、方言・言い慣わし・禁忌・子供の遊戯・駄洒落の項目ごとに整理したもので、郷里近くの言葉でも澤田自身が聞き慣れない言葉は除くという、資料としての確実性を重視した態度で編まれています。文庫本サイズで 130 頁程の小冊子ですが、奈良県の民俗誌として高く評価されています。

澤田家と医学の道

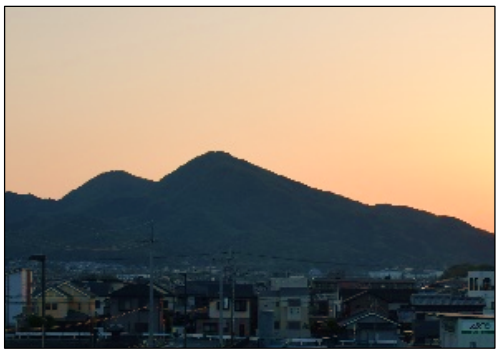
澤田は小児科医として診療する傍ら民俗学を研究しました。医師の道を希望したのは、少年期に近村のペスト騒ぎを見たことによると述べていますが、それにもまして父定十郎の考えが大きく影響しているようです。定十郎は明治 22 年（1889）に酒造りを本格化させて、澤田酒造の基礎を築いた優れた事業家でしたが、現当主の澤田定至人（さだしと）氏によると、子供達の教育にも熱心だったといい、将来は事業家か、医学の道が望ましいという考えを持っていたようです。その言葉通り、長男定司は大阪帝国大学醸造科で学んで家業を継ぎ、三男定介は大阪帝国大学医学部を出て、のちに五位堂で医院を開業します。そして四男の澤田も東京帝国大学医学部で学び、大阪で小児科医になります。澤田酒造を継いだ定司は、過酷な酒造りに従う蔵人達の健康を保つため、医者となった弟達の意見を踏まえて西洋流の薬や滋養ではない、自家の酒蔵の酵母菌を使った酵素液を考案します。これがのちに健康食品「澤田酵素」に発展して、酒造とともに社業の柱に成長します。事業家と医師という定十郎の発想は、酒造りとそこから生まれた健康食品という形で澤田家の事業に活かされているといえます。

こうした家族と過ごした生家の記憶や村内外の人と景物、それらすべてをひっくるめて五位堂という環境が、澤田の活動の基調低音として、生涯生き続けていたと思われます。

（岩坂七雄）



『ふるさと』表紙（左）と目次（右）。なお図版の書籍は、奈良女子高等師範学校教授の佐藤小吉（日本史）へ贈ったもの。



二上山の夕景（JR 五位堂駅から）

民俗学と医者であること

澤田四郎作は大正 15 年（1926）東京帝国大学医学部卒業し、同学部の小児科教室副手などを務めました。その間に、医学博士号を同学部から授与されています（論文題目「緑膿菌色素産出に関する研究」）。その後、昭和 6 年（1931）に同大学を辞し、大阪西成区玉出にて小児科医院を開業しました。澤田は「民俗学を一生の学問にしようと開業医になった」と記していますが（東京大学医学部大正十一年会『卒業二十五年』、緒方富雄編集発行、昭和 28 年/1953、p.34）、開業医の忙しさは想定外だったようです。

小児科医としての澤田はその温和な人柄とも相俟って、多くの人に慕われました。診察室には民俗学のカードボックスがあり、診察のあと患者から民俗の話を聞き取ることもありました。玉出の医院は近畿民俗学の拠点、澤田の研究の場でもありました。ある人はその姿を同じく小児科医でもあった本居宣長と重ねました。澤田の初期の研究に「性」の問題が見られたり、植物を採集して標本を作っていたことも、澤田が医学者だったからかもしれません。澤田がシベリアから帰還した際の大和民俗学会の記念講演会が昭和 22 年（1947）11 月奈良女子高等師範学校で開催されましたが、岸田定雄は「この会には、先生採集の満州の植物標本をもとにした女高師の小清水卓二教授の解説があったりして楽しい会合であった」と振り返っています（岸田定雄「懐かしき沢田先生」、『記念文集』、p.32）。

なぜ当時の医者には民俗学に興味を持つ人が少なくなかったのか。澤田とともに近畿民俗学会を支え、同じく医師でもある奥村隆彦は、その理由としてまず理系志望者にも文系的教養を深く学ばせる旧制中学の伝統を挙げます。専門的知識を学ぶ以前に知識人・文化人としての素養を身につけられる教育土壌が澤田らにはありました。また奥村はもう一つ、かつての医学がドイツ医学であったことを挙げます。ドイツ医学は「唯心的」だと奥村は述べます。曰く、当時の医者は、診断方法として、患者が来たら全身を観察する、顔色、話を聞く、つまり「人の観察」から診察に入っていったと言います。それは「物事の表層」より「バックボーン」を推し量るという姿勢であり、それが信仰や宗教など「心性」への関心と繋がるのではないかと推測します（奥村氏談）。

もう一つ考えられるのは澤田らが生きた戦前戦後の時代との関係です。澤田も、戦時下・シベリア抑留・敗戦後の混乱期を体験しています。人間や社会、生死といったことを考えさせられる機会の連続であったでしょう。そうした様子は、澤田が卒業した東京大学医学部の同窓会が戦後出版した記念誌からも伺われます（前掲『卒業二十五年』）。澤田は、医者として、また激動の時期を生きた知識人として、日本人の心意伝承解明に真摯に向かったのでしょう。

（寺岡伸悟）

大
澤田四郎作

【4】東京大学医学部大正十一年会『卒業二十五年』より。昭和 26 年におこなった同窓会の時点での、澤田の同級生医師たちの 84 名の感想集である。

【5】深夜に患者からの依頼で往診に出かける澤田博士とその支度をする婦人。著名人の家族を紹介する新聞の連載企画で澤田一家が紹介された際のイラスト。
（『大阪時事新報』昭和 11 年 8 月 10 日号と推定）

奈良の郷土史家高田十郎と澤田四郎作

澤田四郎作と民俗学

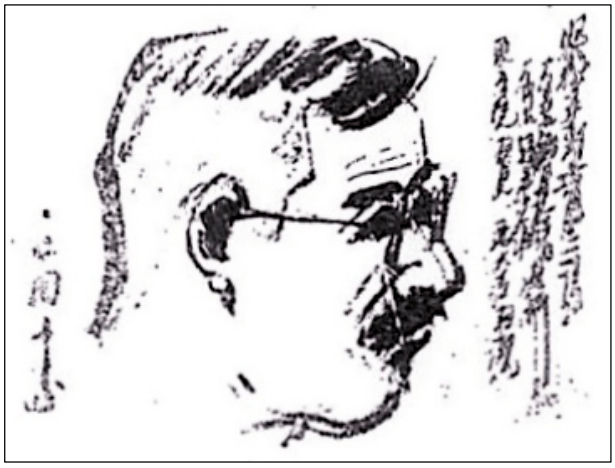
澤田四郎作は、大阪で小児科医を本業とする医者であり、もう一つ、民俗学研究者としての顔をもっていますが、澤田はいつから民俗学に関心をもちはじめたのでしょうか。

その詳細は不明ですが、おそらく旧制郡山中学校か、第六高等学校時代ではないかと推測されます。しかも、澤田は民俗学というよりも、考古・人類学、とくに「性」に強い関心があったといわれます。これは、医学部に在学していたことにも関係しているようですが、澤田の著作目録によれば、東京帝国大学に入学した大正 10 年（1921）に「大和の性的紙巡り」や「性に関する絵馬と性的供物」(『性』6 巻 4 号）を発表、それ以降も「性」や土俗信仰に関する論考が多くみられます。こうした澤田の学問的関心が、いわゆる民俗学にスライドしていくのは、昭和 2 年（1927）11 月に砧（きぬた）村の柳田国男邸を初めて訪問、民俗学を生涯のライフワークに位置づけ、調査・研究をするようになってからといわれます。

奈良の郷土史家高田十郎と澤田四郎作

澤田四郎作が民俗学研究をするうえで大きな影響を与えたのは高田十郎（1881～1952）であるといわれます。「私が学生の頃より、幼時寝物語りに聞かされた祖母の話を記録しておかうといふ心持になつたのも、氏の克明な記録を読み始めてからの事であつた様に思ふ」と、澤田自身も述懐しています（高田十郎『随筆山村記』、桑名文星堂、昭和 18 年/1943、澤田四郎作序文）。

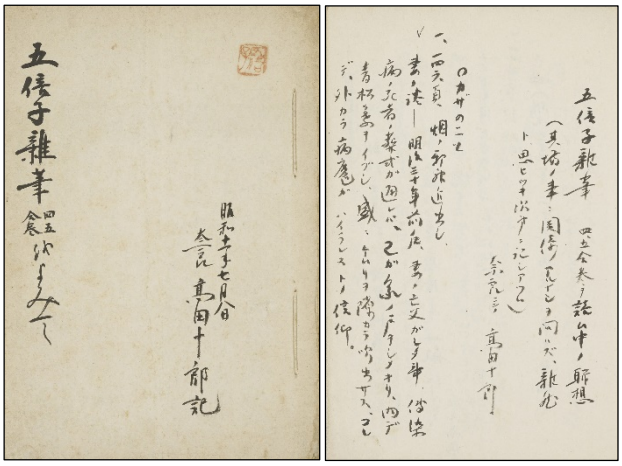
高田十郎は兵庫県赤穂郡矢野村小河（現赤穂市）の出身で、早稲田大学高等師範部歴史地理科を卒業、明治 40 年（1907）10 月、奈良県師範学校教諭となり、国語漢文を教えました。そして同校に昭和 6 年（1931）3 月まで勤務し、昭和 27 年（1952）6 月に 71 歳で死去しました。その間、『添上郡誌』や『奈良県風俗志』などの編纂に従事し、大和考古学会・大和史学会の設立にも関わりました。また同 9 年（1935）10 月に奈良郷土会を設立し、会長をつとめました。当時、高田十郎は、奈良女子高等師範学校教授の水木要太郎（1865～1938）とともに、奈良県の郷土史学界の先人であり、重鎮としての存在でした。とくに高田は奈良に関する歴史・民俗・考古などあらゆることに精通しており、澤田も高田や水木の存在を知っていたと思われます。



仲川明著刊『大福画帖』（1969 年）より、東大寺観音院での高田十郎（昭和 12 年〔1937〕頃）。同画は仲川自身のスケッチである。仲川は郷土史家で、高田の奈良県師範学校時代の教え子。当時は奈良県立図書館の司書、戦後に館長。奈良郷土会・奈良県童話連盟会長の高田のもとで事務局を担当した。

高田と澤田との関係がいつからはじまったのでしょうか。

高田の「自筆年譜」（『まほろば』16 号、奈良県高等学校国語文化会、1973 年）や『なら』によると、大正 13 年（1924）に「東京の澤田四郎作氏から益を得はじめた」（「自筆年譜」）、あるいは同年 8 月に「東京ノ未見ノ人沢田四郎作氏カラ「PHALLUS KULTUS」第三号クル」とあり（『なら』31 号、大正 13 年/1924。



【6】高田十郎による『五倍子雑筆四、五巻を読む中の連想』表紙（左）と 1 丁オモテ（右）。昭和 11 年（1936）7 月 8 日の日付がある。大阪大谷大学図書館所蔵『Phallus Kultus』は高田十郎への寄贈本であるが、その 1 号見返しに、「本雑誌ハ昭和二十二年十一月二十九日奈良女高師ニ於ケル余ノ帰還（ソ連ヨリ）歓迎講演会ノ日、高田十郎先生ヨリ贈ラレシモノ也」とある。シベリア抑留から無事に帰還した澤田に対する、高田の喜びと愛情がうかがえる。

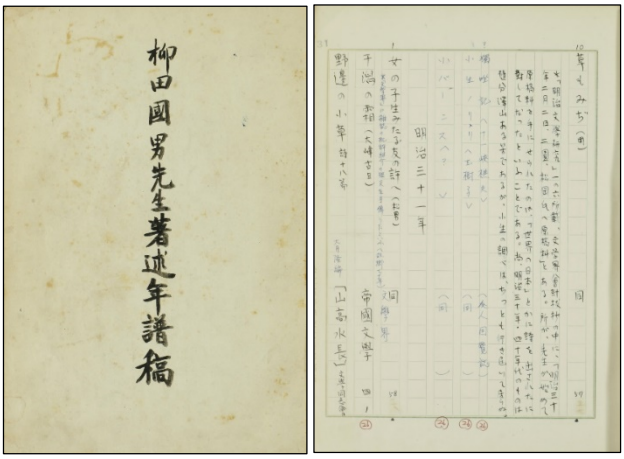
クレス復刻版 2 冊目、p.443)、少なくともこの年から高田と澤田の交際がはじまったとみるべきでしょう。澤田はその後、「Phallus Kultus」を大正 15 年(1926)9 月の終刊号まで送り続けています(『なら』32〜35・38・39・41・44 号)。

一方、澤田四郎作らは、大正 15 年 6 月 6 日に東京大森町の谷木光之助宅で最初の考古・人類学の研究会を開き、澤田のほか、坪井良平・森本六爾・榧本亀治郎(大正 11〜13 年に奈良女子高等師範学校歴史教室雇員)・谷木らが参加しています。翌 7 月には第 2 回を開き(『なら』43〜44 号、坪井良平来信)、さらに同年 10 月 30 日にも同会が開かれ、いつものメンバー以外に、内務省神社局の谷川(のち大場)磐雄、東京帝室博物館鑑査官補の後藤守一が加わり、森本六爾・後藤を中心に考古学の意見交換が行われました(澤田四郎作「日誌」)。

このメンバーのうち、磯城郡織田村大泉(現在の桜井市大泉)出身の森本六爾は、上京する以前の大正 10 年(1921)12 月 11 日に高田十郎と初めて会ったといいます。また同 12 年(1922)3 月に森本は、高田の奈良県師範学校時代の教え子で添上農学校教諭の田村吉永とともに「大和史学会」の設立や雑誌「土」の発刊に奔走しており、また翌 13 年 6 月頃には上京していたことがわかります(『なら』11・15・17・18・29 号)。坪井良平とは、同 12 年 2 月 26 日に初めて便りがあったといいます(「自筆年譜」・『なら』17 号)。これらのことから、坪井や澤田四郎作は高田十郎を通して森本六爾を紹介されたと思われます。

しかし、高田十郎と澤田四郎作の交流は大正 13 年にはじまったとはいえ、実際に高田と澤田が直接出会うのは昭和 6 年(1931)2 月 8 日のことで、それも奈良あやめ池の九十九豊勝宅でした(『なら』54 号)。九十九は「性文化」や「土俗信仰」の研究をしており、同 3 年に東洋民俗博物館を設立、資料の収集をしていました。澤田とは同じ研究仲間で交流は深かったといえます。その後、澤田は同年 7 月に東京から大阪市西成区玉出に居宅を移し、小児科医院を開業します。大阪に移った同年 11 月 11 日にも、澤田と九十九は高田宅を訪れています(『なら』56 号)。

【7】澤田家に遺されたアルバムに添付されていた柳田国男写真。澤田に柳田のことを教えたのは後藤捷一で、澤田から贈られてきた『生殖器崇拝概論』の返信の際に、柳田の『石神問答』を澤田に教示したのだという(澤田四郎作「私が民俗学に入るまで—後藤氏の学恩—」、後藤捷一編『祖谷山日記』、1962 年)。



【8】水木直箭作成『柳田国男先生著述年譜稿』。昭和 26 年(1951)6 月序。水木直箭「はしがき」に、「先生のお手もとに送った原稿以後訣ったものを増補し、一本を近畿民俗学会々長澤田四郎作君の書庫に納める」とある。原稿には、多数の増補訂正が赤や青で書き込まれている。

澤田四郎作と柳田国男の交流は、いつ頃からはじまったのでしょうか。

澤田四郎作は、高田十郎や田村吉永を通して昭和 2 年(1927)あたりから柳田国男との交流を深め、柳田が創刊した『郷土研究』にも投稿をしています(5 巻 3〜5 号、7 巻 1 号・5 号、昭和 5〜6 年)。こうした柳田の影響もあって、澤田はこの頃から従来の「性文化」「土俗信仰」という考古・人類学研究から民俗学的方法を研究の主体とするように変わっていきます。そして同 9 年(1934)柳田のすすめもあって「大阪民俗談話会」(のちの近畿民俗学会)を発足させ、会長に就任しました。同会には奈良から高田十郎・岸田定雄・水木直箭らが参加しています。こうした澤田四郎作の民俗学を考えるうえで、柳田国男や高田十郎の存在は大きかったといえます。

その後、高田十郎は、『大和の伝説』(昭和 8 年/1933)、『随筆山村記』『随筆民話』『奈良百題』(昭和 18 年/1943)、『大和の伝説』(増補版、昭和 34 年/1959)をあいついで刊行しましたが、澤田四郎作は『随筆山村記』と『大和の伝説』に序文をそえています。

一方、澤田四郎作は、戦後、シベリア抑留から帰還し、大阪を拠点に近畿民俗学会(大阪民俗談話会の後身)の活動を続けましたが、時々実家のある奈良に帰り、高田十郎・水木直箭・笹谷良造・岸田定雄ら奈良の研究者とも交流しました。

(山上豊)

澤田四郎作における交際と学問交流

筆写ノートから刊本へ

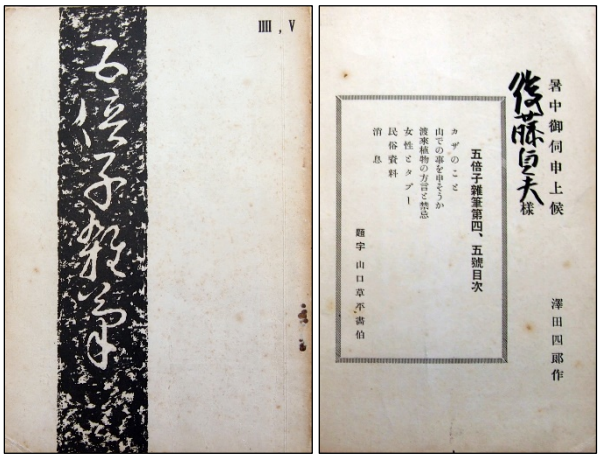
澤田には、みずから「暇を偸んで書きつけて来た」ノートがありました(『ふるさと』自序、昭和2年/1927)。それらのメモは、のちに『五倍子雑筆』と題された半紙二つ折りの毛筆写本にまとめられていきます。現在は、そのうちの4〜24巻が宝塚澤田家に遺されています。ここに収められた記事の数々はその後の澤田の著作の礎となっていきますが、澤田が謄写版『Phallus Kultus』(大正13/1924〜15年/1926)や『無花果』(坂本書店、大正15年)などを公刊しようと思い至った背景には、「自分の智識を豊富にするには思ひきつて書くに限る」という考えがありました(『無花果』序文)。それはいわば、筆写のメモやノートという、閉じた、堆積型の「知」のあり方から、公刊という、開かれた、循環型の「知」のあり方への転換といえるでしょう。そしてまたこの決意は、自ら伝え聞いたことがらが「ただに私の祖母の思ひ出のみとはならぬであらう」(『大和昔譚』自序、昭和6年/1931)ことや「学問への感激」(『手向草』後記、昭和14年/1939)といった、澤田が学問と真摯に向きあったところに生まれ育っていったものでした。

つながりとひろがり

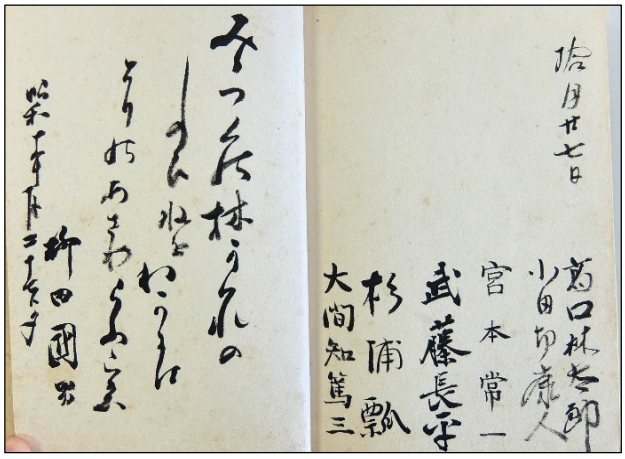
昭和6年(1931)に大阪市西成区で小児科の開業医を始めた澤田でしたが、病院とは異なった患者対応などによる「時間的束縛」、すなわち「発病は夜と昼とを超越して来り、たとへ閑日といへども一人の重症があれば、心それに虜はれて、落ちついて本を読む心のゆとりを持つ事が出来」なくなっていきます。それを澤田は「自己のない生活」と述べていますが(『五倍子雑筆』1号、昭和9年/1934)、もちろんこれは開業医としての自負の裏返しでしょうし、そうした忙しさのなかで『五倍子雑筆』を公刊しえた自負でもあるでしょう。では、いかにして澤田は「自分の智識を豊富にする」ための「自己」の時間をつくっていったのでしょうか。

一つは、患者と向きあう時間それ自体が聞き取りの時間でもあったことが挙げられます。たとえば『五倍子雑筆』2号(昭和10年/1935)には「目黒省平氏夫人よね子氏の談」が掲載されていますが、同氏とは「開業した始めより令息智郎貞雄両君を診察した事が動機となつて」います(緒言)。それぞれに「ふるさと」を持った患者さんたちと向きあい話しあうことは、澤田にとっては問診でもありフィールドワークでもあったのです。澤田の診察室に調査カードが置かれているのも、こうしたあり方に与るところが大きいといえるでしょう(後掲「カードからみた澤田の知的営為」参照)。

二つには、澤田家が学問交流の場となっていたことです。「出かけてゆく自由の少い職業を持つてゐる人間にとつては、訪れて来られる事が唯一のたのしみである」ことから(『五倍子雑筆』3号消息、昭和10年/1935)、澤田は来訪者に一筆署名してもらっていました。奉書に記された署名の数々は、のちに箔を散らしたクロスで製本され、題簽を付して保管されていましたが、それは裏をかえせば、この芳名録が澤田にとって名寄せ以上の存在であったことを示しています。現存するのは、遠野市立博物館が所蔵す



『五倍子雑筆』4･5号(昭和11年〔1936〕7月)表紙(左)と見返し(右)。「暑中御伺申上候　澤田四郎作／　様」が最初から印刷されている。名宛人の後藤貞夫は大分県在の郷土史家。

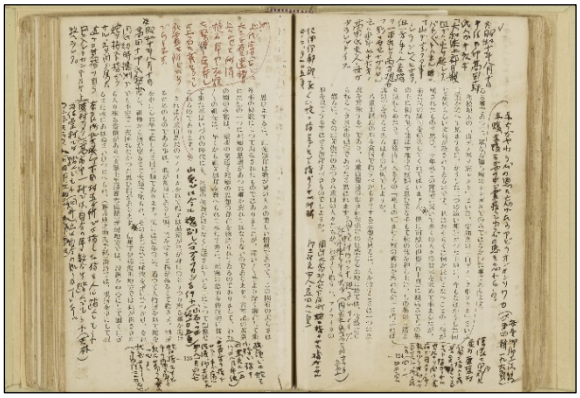


【9】『五倍子居芳名録』。昭和10年(1935)10月27日に柳田国男や宮本常一、大間知篤三らが澤田邸を訪問している。左丁に柳田詠歌「みゝつくの林かくれのしのひねをねわかにはとりのあさわらふこゑ」。

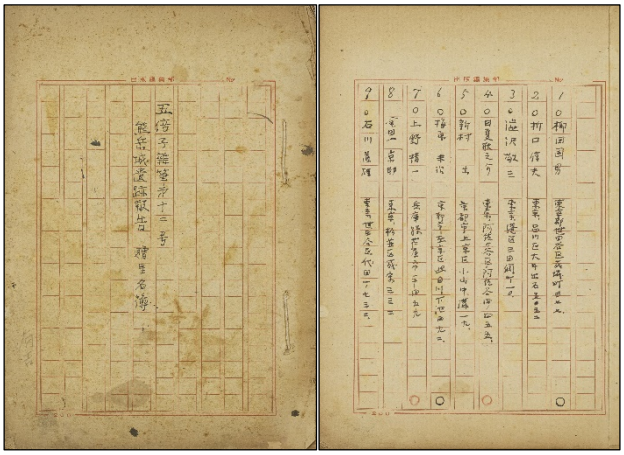
る昭和 10 年分の『五倍子居芳名録』のみです。澤田家には柳田国男、渋沢敬三、宮本常一などをはじめ近隣遠方から人びとが来訪し、そこでさまざまな議論が交わされていきます。常に研究会のような学問交流の場として機能していた澤田家は、大阪民俗談話会（のちの近畿民俗学会）などの学問交流の場が組織されていく起点ともなっていくのでした。

三つには、出版です。澤田が自費出版した雑誌や書籍は、非売品ゆえに寄贈をとおして流通していきました。『五倍子雑筆』では時候の挨拶や献呈署名欄を最初から設けており、澤田の出版企図が交流と不可分にあったことをうかがわせます。のちに『五倍子雑筆』からこれらの欄はなくなっていきますが、たとえば天理大学附属図書館が所蔵する『続飛騨採訪日誌』(『五倍子雑筆』8 号、昭和 14 年/1939) には「賀正　十四年一月元旦／藪重孝様／恵存　澤田四郎作／今日は尾瀬と鬼怒沼紀行有がたく存じます、こんなに写真がきれいにうつるとは今まで知りませんでした、これから是非カメラの勉強の必要を感じ候／十二月二十四日夜」という澤田自筆の書き入れがあり、『五倍子雑筆』をはじめとする澤田の自費出版の機能は変わるものではありませんでした。交際の挨拶と研究交流とをおなじ環のなかに位置づける澤田にとって、自費出版と個人頒布はうってつけの方法であったといえます。

自身の考えが流通するということは、それに対する批判や意見がおのれに還ってくるということでもありますし、そうした新たな知見で自己をアップデートしていく循環構造になっています。大阪大谷大学澤田文庫が所蔵する『五倍子雑筆』には細かい字でびっしりと書き込みが見られますが、その一つ一つに「昭和十年八月十日午後消印高田十郎氏ハガキ教示」や「青山冬樹氏談」、「民俗学一ノ二号（四六頁)」といった出典が明記されています。『五倍子雑筆』など自費出版による雑誌や書籍が、まさに「自



【10】『五倍子雑筆』3 号（昭和 10 年 8 月）に見られる書き入れ。高田十郎からの指摘をはじめ、郷土誌等からの引用が書き込まれている。



【11】『熊岳城遺跡報告書贈呈名簿』表紙（左）と 1 ページ目（右）。通し番号・氏名・住所が記されている。柳田国男に始まり、折口信夫、渋沢敬三と続いていく。

分の智識を豊富にする」ためのものであったことがまざまざと見てとれます。澤田にとって交際・交流とは、「知」を紡いでいく営みそのものだったのです。

もう一つの流通—ひろがるつながり—

澤田は、雑誌や書籍の寄贈先をきちんと名簿にしていました。大阪大谷大学澤田文庫が所蔵する『熊岳城遺跡報告書贈呈名簿』は五倍子雑筆 12 号『熊岳城温泉附近遺跡の研究』（昭和 26 年/1951）の寄贈先一覧で、そこには 199 名におよぶ人びとや学会が列記されています。しかしながら、送られた書籍や雑誌がずっとその人の手もとにあるとは限りません。なんらかの理由で廃棄・売却されたりしますが、売られた場合は古書として再流通します。澤田は『五倍子雑筆』2 号編輯後記で次のように述べています。「私の作つてゐましたファルスクルツス誌は昭和五年頃東京で七十五円で売れた事をきゝましたが、昨年の古本年鑑には三十円と出て居ます。全部揃つてゐるのは三十五部位です。私の方へよく申して来られますが、私の手元のも揃つて居りません。スピードの時代と見へて、先方へさしあげた五倍子雑筆の第一号がもう古本目録に五十銭と出て居ります」。このことは、実際に『古本年鑑』第 1 年版（古典社、昭和 8 年/1933）で確認できます。ここには、無料頒布の雑誌に高値がついていることと古書になることの早さに対する驚き、そしてつながりとしての著作が古書になったことに対するさみしさがあります。けれども古書になるということは、これまでとは違った位相で書物が流通することであり、それによって新たなつながりの可能性が生まれるということでもあります。澤田への直接の問い合わせは、そうした出会いの萌芽でもあったのです。

（磯部敦）

『記念文集』にみる人とつながり

『澤田四郎作博士記念文集』(以下『記念文集』) は、澤田が亡くなった昭和 46 年 (1971) 5 月 18 日 (享年 71) から一年を経た、翌 47 年 (1972) 5 月に発行されました (非売品)。発起人は岩切章、大江美ヤ子、大藤時彦、後藤捷一、柴田実、高谷重夫、松井佳一、水木直箭、宮本常一の 9 名。編集は奥村隆彦、会の事務、印刷、刊行等については原泰根、米谷金次郎、尾田正幸、萩原真佐子、浦西勉の近畿民俗学会員が務めています (『記念文集』序文、p.1)。

寄せられた原稿は追悼文と追悼論叢に分けられ、前者は遺族の手記を先にし、その次に各人の追悼文が五十音順に並べられています。後者も五十音順に並べ、両方とも書いた人、原稿締切後入稿されたものは、その次に到着順に掲載されています (『記念文集』編集後記、p.292)。

追悼文を寄稿した人は 86 名、論文は 37 名、追悼文と論集の両方は 6 名、合計 117 名の文章が寄せられています。記念文集は最初 200 頁の予定でしたが、結果的には 400 頁にもなりました。追悼文の方は、各執筆者の了解を得て文章の一部を割愛することになりました (『記念文集』「事務局より」、p.292)。当初の予定を大幅に超える寄稿者があったことがわかります。

追悼文を寄せた人の内訳を整理すると【表 1】のようになります。民俗学界、医学界のみならず、澤田の民俗学の講座をうけた婦人会のメンバー、宮司、患者、新聞記者、近所の人、捕虜収容所で共に過ごした人、と多方面に及んでいます。澤田のあたたか味のある人柄、人付き合いを大切にしてきたことが、澤田の人的ネットワークの基礎となっていたことが伺えます。

論叢の方はのちに独立して『澤田四郎作博士記念民俗学論叢』(昭和 47 年) としてまとめられています。執筆者は、ほとんどが近畿民俗学会の会員になっている人たちと思われますが、日本民俗学会をはじめ他学会、他分野等でも活躍している人もおり、各論文末の住所地を見ても、近畿だけでなく和歌山、岡山や伊勢、沖縄等々の多地域にわたっています。論考テーマも民俗行事や信仰、昔話など多彩な内容となっています【表 2】。

『記念文集』追悼文—澤田を偲ぶ声から—

追悼文を読むと、澤田のさまざまなエピソードが記されていて、澤田の人柄や学風を物語っています。民俗学の泰斗で「仏教民俗学」を提唱した五来重(ごらいしげる)は、「日本民俗学は柳田先生一人の力で成立し、成長し

表 1. 【追悼文】追悼文寄稿者一覧

関係		氏名等
親族		澤田昭、澤田幸子、澤田恭子、澤田章子、澤田まさこ、澤田喬、豊沢千鶴江、松村千恵子
玉出連合婦人会 さつき会グループ		赤松エイ子、大江美ヤ子、金井コマ、潮津寿、鳥井あさ、橋本久枝、渡辺操子、和田久枝
患者		河合祐子、河合淑恵、谷和子、野崎博文、山本嘉蔵
軍隊		斉藤優 (軍医、熊岳城陸軍病院で一緒)、山地靖之 (北朝鮮平壌三合里捕虜収容所で一緒)、小林梁 (満州奉天省熊岳城陸軍病院)、中村道岡 (満鉄奉天図書情報の編集)
医師仲間		山中郊 (澤田とともに玉出小学校の校医)、中野操 (医史学会関西支部の前身杏林温故会の機関紙「医譚」発行に関与)
同級生		秋葉朝一郎 (東京帝国大学医学部)、岡田啓吾 (大阪府立医科大学〔現在の大阪大学〕予科)、村田定 (大西会、大正10年第六高等学校三部卒業の同窓生)
東大医学部後輩		谷武治郎、平島裕正
新聞記者		黒田清 (読売新聞社)、古山桂子 (神戸新聞社)、小西光 (神戸新聞社)
寺社		萼慧 (はなぶさ・あきら。患者、澤田家の菩提寺寿光寺の住職。澤田没時は大谷女子大学〔現在の大阪大谷大学〕教授で、資料散逸を防ぐため同大学への澤田旧蔵資料群の受け入れに携わる)、尾崎虎二 (澤田が玉出の「だいがく」を調査、評価した生根神社の宮司)
知人		川端直正 (大阪市文化財顕彰委員会)、重山重治 (愛泉女子短期大学同僚)、福田八郎 (大阪市立玉出小学校教諭)、山下トシ子 (妻幸子の同窓)
学会・研究関係	大阪府	岩切章、楳垣実、大越勝秋、奥村隆彦、小谷方明、米谷金次郎、小山三珍、後藤捷一、あふみ・ともしち、鈴木東一、高原弦太郎、中谷政一、原泰根、松浦仙逸、水原渭江、三村幸一、山口最子、山野良子
	奈良県	乾健治、岩井宏実、尾田正幸、岸田定雄、九十九豊勝、保仙純剛、水木直箭、中田太造
	東京都	葛谷利春、桜田勝徳、田中克己、牧田茂、宮本常一、最上孝敬
	兵庫県	上井久義、喜多慶治、辰井隆、山田隆夫
	京都府	五来重、柴田実、松井佳一
	沖縄県	桃原茂夫、上江洲均
	その他	斉藤槻堂 (福井県)、谷省吾 (三重県)、村田熙 (鹿児島県)、吉町義雄 (静岡県)

たものではない。（中略）（澤田）先生は若い研究者の報告を聞くのが好きで、近畿民俗学会の月例会を維持継続され、学会誌を編集・発行して来られた功績は大きい。そのおかげでこの学会から多くの研究者が育ったのである」と記しています（五来重「想い出」、『記念文集』、p.43）。また方々での民俗調査の経験をふまえて多くの著作を公刊した宮本常一は「本好きの先生は診察室の隣の、せまい応接室に本をぎっしりならべていた。私の気付いていないような本を次々に買いこまれており、私はその本の名前をメモして東京へかえって買うことが多かった。先生の書庫にはそうしためずらしい本がギッシリとつまっていたはずである」（宮本常一「沢田先生の思い出」、『記念文集』、p.76）と澤田の思い出を綴り、『民俗学の旅』の中で、民俗学の研究を学問として学んだ3人の師として、柳田国男、渋沢敬三、そして澤田をあげています（宮本常一『民俗学の旅』、文藝春秋、1978）。

その宮本常一や岸田定雄に旧制郡山中学で学んだ岩井宏実は、同中学校5年時にたまたま保仙純剛（ほせんすみひさ）から紹介され出席した近畿民俗学会で、澤田から出たばかりの柳田の本をさし出され、「よく読んで民俗学の勉強をしなさい。中学生で初めてこの会に来た記念です。これからも毎回会に出てきなさい」と声をかけられた時の感激を記しています。「とうてい先生の目にとまっていないだろうと思っていたのが、よく見つけてくださった（中略）この日が私に民俗学を志す日であり、民俗学の勉強に決意を固めた日であった」と記しています（岩井宏実「思い出」、『記念文集』、p.18）。岩井はのちに大阪市立博物館を経て、国立歴史民俗博物館教授、帝塚山大学学長などを歴任します。大学では民俗学のコースを定着させることに尽力して、民俗学を学ぶ学生を指導しました。

大阪市西成区玉出の婦人会「さつき会」は、グループ活動として、昭和45年（1970）度の婦人会学習課目に民俗学を選択して、近畿民俗学会の会長であった澤田が、「郷土史と民俗学」の講師を務めています。講義は一年間続き、月例会が12回、そのうち2回は見学会がおこなわれました。この講義は昭和46年（1971）度も引き続き開催されましたが、5月、2回目の講義が終了後に澤田が急逝したため、高谷重夫（たかやしげお）がその後を継ぐことになりました。婦人会のメンバーが追悼文集の発起人に加わり、20名のうち8名が追悼文を寄せていることから、いかに澤田が地元の婦人たちから慕われたかがわかります。

澤田は大阪府の文化財専門委員も務めましたが、大阪市西成区玉出の生根（いくね）神社に伝わる「だいがく」（竿に提灯と鈴をつけたものを立て、雨乞いをする行事）保存のため、大阪府重要民俗資料指定をめざして奮闘していました。生根神社の宮司、尾崎虎二はそのいきさつを記し、玉出の地域が新しい住人によって変わりつつあり、精神的にも経済的にも細々とだいがくを維持している現状を澤田が察してくれたと述べています（尾崎虎二「玉出のだいがくと沢田先生」、『記念文集』、p.26）。この生根神社の「だいがく」は、澤田没後の昭和47年に「玉出のだいがく（1基）」として大阪府の有形民俗文化財指定を受けています。

民俗学を通じて、地域における人びとの暮らしを見つめる面白さ・大切さを説き続け、それを人的ネットワークとして育てていく。「縁の下の力持ち」と言われる澤田の人柄と生き方があってこそできたことではないでしょうか。

（樽井由紀）

表2. 【論叢】各地の民俗学者とのつながり

住所地	氏名	論文タイトル
兵庫県	庵逧巖	伽の心意―伽の字義―
	杉本尚次	ヨーロッパの民俗学・民俗学博物館を訪ねて
	橋文策	新地木地屋の正月―大正時代を中心に―
	田中久夫	七日盆と盆行事
	日野西真定	近世における但馬農民の霊場順拝
	谷垣桂蔵	山でのことを忘れたか
	鴻山俊雄	琴平宮にある「降神観」の額
	藤井英男	古代社会と女性祭祀
	吉田省三	東播磨における頭神事組織の一考察 ―兵庫県東条町吉井の場合―
大阪府	奥村隆彦	大阪の庚申
	高谷重夫	鐘と雨乞
	永野忠一	柿をめぐる民俗考
	宮本正章	丹波の寝僧
	渡辺正	正月の餅と大納言雑煮
	水原渭江	中国の雨乞い
	原泰根	祝神としてのテンパクさん
奈良県	乾健治	天理市別所街の紅白当屋座と旧宮座
	玉村禎祥	紀州岩出町の民俗―人生儀礼―
	岸田定雄	百二歳山崎こふさ媼聞書
	保仙純剛	宮古（沖縄県）の懸
東京都	津田秀夫	先度講について
	宮本常一	民具学提唱
	鎌田久子	涕泣儀礼―特に泣女について―
	関敬吾	桃太郎の郷土
京都府	井上吉次郎	人狐
	竹田聽洲	同姓部落の族制―近畿民俗学会・近江今津町共同調査報告―
三重県	堀田吉雄	精進祭採訪記―三重県―志郡美杉村・三多気・杉平―
	倉田正邦	志摩の文楽人形についての研究―安乗人形座について―
岡山県	佐藤米司	死者はどこへ行くか
	土井卓治	枕石の系譜
滋賀県	橋本鉄男	筒井招源丹―木地屋の医方と漢方覚書―
神奈川県	大藤時彦	産室の火
宮城県	夏堀謙二郎	「糸取り婆」という遊び
島根県	牛尾三千夫	麦搗唄の背景
沖縄県	本永清	ユの概念とその機能（一）
和歌山県	吉川寿洋	日高の民謡
記載なし	若尾五雄	かっぱのしりぬぐい―河童家伝薬の伝説―

（注1）追悼文、論叢の両方に寄稿した人は名前に色をつけた
（注2）住所地は『記念文集』各論考末尾の所付に拠る

大阪民俗談話会（近畿民俗学会）

民俗研究者としての澤田四郎作の大きな功績のひとつが、大阪民俗談話会（現在の近畿民俗学会）を主催して、関西で民俗を研究する人達に活動の場を提供し研究を支え続けたことです。昭和の初め頃、大阪、神戸、京都などには民俗について語り合う集まりがあり、それぞれで活動をしていました。澤田は、昭和 9 年（1934）10 月に講演のため来阪した柳田国男から、あまり視野狭く一地域に固まらず、相互に往来して研究に励むべきとの示唆をうけます。そして柳田から同様の話しを聞いた宮本常一らと図り、11 月に大阪府堺市で第 1 回の大阪民俗談話会を開き、第 2 回からは医院を兼ねた澤田の自宅を会場にして例会を続けます。

澤田のもとには、関西はもちろん、柳田や折口信夫、渋沢敬三はじめ全国から多くの民俗研究者などが訪れ、澤田家は学問を介した交流の場となります。奈良からも、県内の民俗調査を主導した高田十郎、水木直箭、岸田定男、笹谷良造などが参加しています。

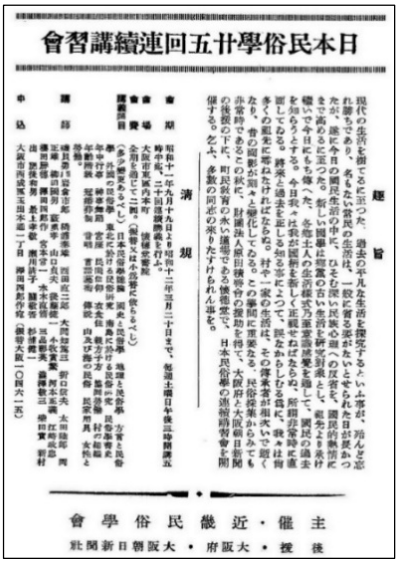
昭和 10 年（1935）、東京で柳田国男還暦記念の日本民俗学講習会が開催され、それを機会に民俗学初の全国組織「民間伝承の会」が設立されます。こうした動きに刺激を受けて、大阪でも澤田たち大阪民俗談話会が主催（大阪朝日新聞社後援）して、柳田国男還暦記念講演会を朝日新聞社講堂で開催します（p.2【1】図版参照）。柳田の挨拶、人類学者 W・シュミットらの講演があり、折口に師事した大和郡山在住の水木直箭による『柳田国男先生著作目録』が参加者に配布されました。

昭和 11 年（1936）2 月には、機関紙『近畿民俗』が創刊され、会の名称も「近畿民俗学会」となります。以後『近畿民俗』には、毎号質の高い各地の調査報告や論考が掲載されます（編集は神戸在住の太田睦郎。昭和 12 年〔1937〕2 巻 2 号まで刊行）。

この年のもうひとつの大きな事業が、日本民俗学 25 回連続講習会の開催でした。前年に東京で行われたような講習会を関西でも開き、民俗を研究する同志を広く得たいという趣旨で企画され、場所も「町人教育の永い道場」である大阪の懐徳堂書院を会場に選んで、25 回という長期にわたる大事業を成功させました。大学などに足場を持たず、「民間学」として出発した民俗学にとって画期的な事業であり、この頃が関西の民俗学が最も民俗学らしく高揚し、充実した時期であったように思われます。

澤田は例会会場に自宅を提供するほか、機関紙発行や講座開催にも、その中心となって取り組みましたが、表だって派手に振る舞うことは好まず、「縁の下の力持ち」として、永く会が継続・発展することに尽くします。そうした態度は、戦争による中断をはさみ、昭和 23 年（1948）に復興した戦後の近畿民俗学会でも同じで、例会や学会共同調査、機関紙の復刊に尽くし、自宅を訪ねる人があれば、いつでも暖かく迎え入れました。戦後の民俗学は、大学でも講座が開講されるようになり、一定の市民権を得た格好となりましたが、当時活躍した関西の研究者の多くが、やはりその後も近畿民俗学会で研鑽を積み成果を生み出していきました。

（岩坂七雄）


日本民俗學廿五回連續講習會

趣旨

現代の生活を樹てるに至つた、過去の平凡な生活を研究するといふ事が、殆んど忘れ勝ちである。各もない貧困の生活は、一般に貧者を思はせられた日が無かつたが、進化今日の問題生活の中に、ひそむ深い意味の古い生活を研究対象として、組先より来れば、民俗学の研究を通じて、国民的自覚を高めると共に、今日の生活に、新しい意味を与へる。今我々は、自主的に、民俗学を通じて、民俗学の研究を通じて、国民的自覚を高めると共に、今日の生活に、新しい意味を与へる。

清規

會期　昭和十一年九月十日より昭和十二年三月二十日まで、毎週土曜日午後三時開講

會場　大阪市東区内本町　後援史蹟会

會費　金壱円三拾銭

講義課目　（金参拾銭あるべし）

講師　（略）

申込　（略）

主催・近畿民俗學會

後援・大阪府・大阪朝日新聞社

『近畿民俗』掲載、講習会の告知

近畿民俗

第一巻　第一號

目次

成長は自然　柳田國男

三食方言集　藤　重

山城綴喜郡田原村の宮座に就いて　高谷重夫

歌垣村　肥上　櫻田勝徳

神主わたしと鬼行ちゃ下居原神社の宮月行事　河本正義

小豆島大谷の魚業　宮本常一

和泉郷育餅谷部落　小谷方明

吉野地唄抄　中尾新雄

美子に出るコトコト　東播磨地方の産子行事　西谷勝也

短信二題　有名の地蔵祭行事　福島県郡山盆踊　太田睦郎

播但山村のたきもん　稲島公雄

島取郡西伯郡見聞雑記　澤田四郎作

柳田先生著作目録補正　水木直箭

篤集帳から　土屋治雄

堺の民間神と信仰断片　小島瓔禮

北河内の貧話二つ　大阪府北河内郡水本村行事　山口康雄

吃驚、中國地方育の南部境界線　玉岡松一郎

会員等一覧表補引（覚書）

編輯後記

奥付

『近畿民俗』創刊号目次

カードからみた澤田の知的営為

澤田は調査で知った事柄や書物・論文などで興味をもった事柄などをカードに 1 つずつ書き込み（資料は貼り付け）、項目別に整理していました。カードボックスは澤田医院の診療室や書斎に置いてあり、澤田のもとを訪れた多くの研究者たちの記憶に残っています。これが澤田の研究活動の源泉であり、研究者澤田四郎作のシンボルのような存在です。

学問にとって研究対象を「分類する」ことは、対象に対する研究者の捉え方、思考のあり方が現れたものだといえます。民俗学では人間生活のすべてにわたる民俗事象をどのように調査するかという調査観点の一覧としても重要な意味合いをもっています。現在大阪大谷大学図書館に残されている澤田のカードボックスは 55 箱（以下「大分類」と表記）、各箱の中が多くの下位項目に分かれており、全部で約 2 万枚のカードから成っています。大分類や項目表示が不明のものもあり、ここから澤田の思考の総体を明らかにすることは困難ですが、ある程度の特徴を指摘することはできます。澤田のカードボックスを眺めると次のような特徴が見て取れます。

- 信仰・迷信などの項目
- 「医学民俗語彙」という項目
- 語彙（言葉）への関心

澤田が信仰への関心が高かったことは著作でも知られていますが、カードボックスの大分類を見ても、「妖怪」、「伝説神話」、「石神信仰」、「鍾馗・門口」、「昔話・伝説」、「神道・風俗」、「仏教」、「キリスト教」「修験・巫女」、「忌詞」などが目に入ります。また「交易」というボックスの大分類が一つありますが、それ以外にも、移動する人々（諸職・宗教者も含まれる）への関心が高かったようです。「医学民俗語彙」という大分類があるのは医者・澤田四郎作ならでは、でしょうか。そして語彙といえば「農山村語彙」、「漁村語彙」など言葉を基点に情報を整理し思考した様子が見えます。

澤田旧蔵史料からは、『郷土生活研究採集手帖』（昭和 9 年〔1934〕から柳田国男指導のもとで始まった山村調査プロジェクトのために作成された調査用手帖で、山村生活に関する 100 の質問項目が記載されている。以下「採集手帖」）が見つかっています。田中宣一によればそれは、心意伝承を明らかにするために、村人の主観を明らかにしようとする志向が強い項目からなります（田中宣一「『山村調査』の意義」、『成城文藝』109 号、1985）。澤田のカード分類は、この柳田らによる「採集手帖」の項目に近いようです。柳田が民俗学の採集目的とした日本人の心意伝承の解明に澤田も専心していたといえるのではないでしょうか。

他にも、「煙草・相撲」「家畜」「餅」「交際厄・動物」「酒・隠語」「うるしかき・炭焼・寒天造り・製紙」といった大分類があるのも、澤田の研究的関心の特徴がよく現れているといえそうです。

（寺岡伸悟）

【12】大阪大谷大学が所蔵する澤田のカードボックス群（写真左が外観）。引き取手の上、ボックス表面中央に分類項目（本稿では大分類と表記）が嵌めこまれている（写真中央上）。ボックスを開くと、黄色いタグ付きの仕切りカード（本稿では下位項目と表記）で分類されたカード（手書き・写真・資料貼り付けなど）が整然と収められている。

澤田四郎作 追懐

父の想い出

澤田恭子

今父について思い出す事、それはあの慈愛に満ちた眼と、大和弁の優しい言い廻しです。

私が初めて父にお会いしたのは、主人との見合いの日でした。民俗学の岸田先生が、私が教生に訪れた校長だった御縁で、お世話になったのです。その時主人は然る事ながら、父の大和弁に何かホッとするものを感じて、「この家だったら行けるかな。」と思ったのでした。結婚して程なく主人が、見合いの時、父が「あれを貰うとき、あれやったら間違いない。」と言ったので、結婚したと話したのです。それ以来、気楽な私は勝手に気に入られていると信じ、父には甘えさせて貰いました。

薬局で薬を調剤しながら、タバコを咥える父を見て、灰が中に落ちないかとヒヤヒヤしたり、二年後に宝塚に越した私たちを訪ね、近くを散策して、カードに資料を書き留められていた事、お昼に出した料理を美味しいと、いつも全部食べ、後にその料理を図入りで、日記に書いていてくれた事。まだ一杯思い出す事は有りますが、私が一番尊敬する事は、あのシベリアでの抑留生活で沢山の収集をして、無事に帰られた事です。それは生まれつき丈夫な体と、そこで生きる意味を持てたことだと思うのです。自分を必要としている誰か、又何かが有ることに目を向けて生きられた事、父にとって、それが母の居ない姉弟（こども）であり、民俗学であったと思うのです。帰ってからその調査を纏められ、日記に残されている事や、主人が手紙を出したら、赤で添削して送り返された事などを聞くと、父の精神力の強さと子供への片想いを、思わない訳にはいきません。

さて、私にとっては生家での二十余年と同じ程、父の亡くなるその日迄（その日私は玉出に手伝いに来ていて喘息の患者を診ている父を残して帰りました）、そのみもとで過ごせたことは、私の誇りであり幸せであったと、感謝するばかりなのです。

大輪（たいりん）の花（はな） ― 大叔父・澤田四郎作 ―

澤田酒造株式会社 代表取締役　澤田定至人（さわださだしと）

澤田四郎作は私の祖父・定司（ていじ）の末弟であり、大叔父にあたる。父は定十郎（さだじゅうろう）、母はイキといい、奈良県北葛城郡五位堂村、現在の香芝市五位堂六丁目 167 番地に、明治 32 年、男四人兄弟の四男として生まれている。

父の定十郎は酒造業を営んでいた。これが現在の澤田酒造株式会社である。

定十郎は実業家として名をなした人物で、息子たちの教育にも熱心であった。長男の定司は大阪高等工業（現・大阪大学）の醸造科を卒業、次男・純一（じゅんいち）は学者肌の文人、三男・定介（さだすけ）は大阪医科大学（現・大阪大学）卒業で医学博士、そして四男が四郎作である。私は酒造業を継承した長男・定司の孫にあたる。

大叔父・四郎作は昭和 6 年、大阪市西成区玉出に小児科を開業、その地に居宅を構えることになる。診療と民俗学の研究に忙しかったのであろう、五位堂の実家に帰ることは少なく、一見近寄りがたい雰囲気もあり、幼ない私は遠くから挨拶する程度で親しく話をした記憶はない。

大叔父のことは定司の妻ヒデノ（私の祖母）からよく聴かされた。話題は四郎作が五位堂で生活していた頃のことであった。

子どもの頃は腕白で、酒蔵の大屋根に上って走りまわり、酒を造る蔵人たちからたびたび大きな声で怒鳴られていたこと。

畝傍中学へ入学したが、漢文の試験の解答をドイツ語で書き、教師の怒りをかって退学処分になったこと。その後、長兄・定司の口ききで郡山中学に編入できたこと。

博士号を取得したとき、五位堂村の方々が提灯行列をして

【13】五位堂の澤田四郎作生家（改築前）

祝って下さったこと。

両親が付けた名は「四郎」であったが、後に自身で「作」を付けたことなどである。

昭和 44 年、近畿民俗学会の関係者により大叔父の古稀を祝う会が大阪で開かれ、私は高校生であったが、病に伏せていた母の代理で出席させて頂いた。その後、親族の間で大叔父の雅号をとって「五倍子会（ごばいしかい）」なる従兄弟会が発足したが、今は解散してしまった。

大叔父の没後四十数年を経て、澤田酒造は清酒のみならず醗酵全般に業務を拡張し成長を続けている。また親族内には大叔父と同じく医師や医師を志す人が多いが、澤田四郎作を直接知る人は少なくなっている。

大叔父は「五倍子」ではなく、澤田家の歴史の庭に咲いた香り高い大輪の花である。このような花が咲いていたことを、次代を担う子や孫たちに語り継いでいかなければならないと強く思うのである。

澤田四郎作先生と近畿民俗学会

奥村隆彦（近畿民俗学会名誉会員）

柳田国男先生は民俗学の学会や研究会を地方で作ることをお許しにならない、と思われていた。そのなかでただ一人例外であったのは、澤田四郎作先生であった。それだけ柳田先生の澤田先生に対しての信頼と期待が大きかったのだと思う。

昭和初期、「大阪民俗談話会」として発足し、戦後「近畿民俗学会」と名が改められ、会誌が昭和 24 年復刊第 1 号として出された。そして戦後の亡くなられるまでの間、とりわけ昭和 30 年代から 40 年代の初めにかけてが近畿民俗学会の最盛期であった、と考えている。

東京の渋沢敬三・宮本常一を始め、大阪の小谷方明・鈴木東一・錦耕三・鳥越憲三郎・後藤捷一・小島勝治・若尾五男、奈良の水木直箭・笹谷良三・岸田定雄・仲川明、京都学派では柴田実・五来重・竹田聴洲・平山敏治朗・高谷重夫・井上頼寿・林宏、そのほか近江の橋本鉄男・小牧実繁、伊勢の倉田正邦、兵庫の西谷勝也・玉岡松一郎・河本正義・山田隆夫らが当時の主な会員で、思い出すままに記した。

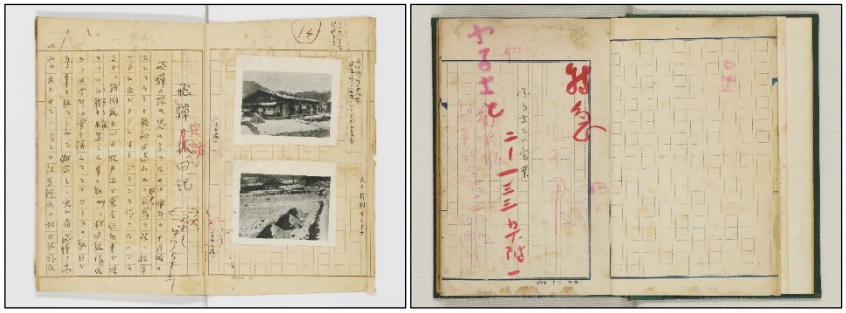
その頃、各地では市町村史の調査編纂が盛んで、会員は協力していた。一方例会では、初めのころは山の神・田の神、後は両墓制がテーマであった。

先生は気さくな方でえらばえることはなかった。我々仲間では「澤田ホテル」と称して遠方からの研究者には自宅を宿として提供され、その節、夕べには近隣の会員に声をかけられて一緒に話を聞く、と言う風に非常に庶民的開放的であった。

忙しい診察の合間に各地に出かけられ採集されたものはカードに記録保存された。今その当時の資料が大阪大谷大学に「澤田文庫」として保管されている。

先生は家庭内のことは何方にも話はされなかったが私には同業の誼か、時々こぼされることがあり、お気の毒に思うことがしばしばあった。民俗学をやることで救われておられたのではないか、と感じることであった。

澤田先生の亡くなられる少し前、近畿民俗学会はサロン的である、という批判が新聞紙上に載ったことがあった。先生は朴訥、温和、心根は優しく抱擁力があり、指導力も優れた方であった。それ故多くの研究者が輩出し、彼らはそれにこたえるように優れた業績をあげられたのであった。サロン的である故にこのような立派な会にすることが出来た、と私は思っている。



【14】澤田家所蔵の稿本類。『飛騨探訪日記』（左）と『ふるさと』（右）。稿本はもう一つのテクストであると同時に、多種の書き入れからは、澤田の、編集者としてのすがたも浮かびあがってくる。

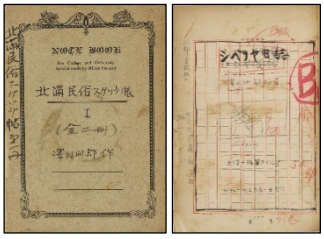
【15】『日誌』昭和 8 年（1933）10 月 15 日条。左丁の絵は、安江不空が澤田宅を訪問した際に持参した山水画の模写か。

今後の展望—結びにかえて—

大阪大谷大学図書館の澤田文庫は、近畿民俗学会を澤田とともに支えた人々も知らない存在となっていた。非常勤講師として偶然同大学に赴いていたなら学研究会メンバーとの「出会い」が、我々の澤田四郎作研究の出発点となった。調べてみると、柳田国男研究で知られる歴史社会学者・佐藤健二氏による優れた近畿民俗学会の研究があり（佐藤健二『柳田国男の歴史社会学—続・読書空間の近代—』、せりか書房、2015）、そのなかで澤田の存在の重要性が指摘されていることがわかった。澤田の地元奈良で始まったこの研究は、まだ「入り口」に過ぎない。たとえば、澤田が戦地で何を「観察」し、どのように「記録」したのか。そのまなざしは、澤田の医者／民俗学者といかに関わりあうのか。また、他の民俗学者のまなざしとの同質性と異質性はどうであるのか。未検証の課題が山積しているなか、それでもこの小冊子を発刊しようとしたのは、この地域研究の先人を奈良県、さらに全国各地の方に思い出していただきたかったからである。

奈良には、澤田四郎作のほかに、この小冊子に名前のあがったたくさんの研究者が存在した。研究会では、引きつづき澤田四郎作という知のメディエーターの全体像を明らかにする研究を行いながら、さらに、奈良の知的ネットワークやそれらの人々が解明し、後世に伝えようとしたことを現代的視点から把握していこうと考えている。また、こうした地元の奈良の先人たちの営みや研究が、奈良の人々、さらに全国の人々にとって、ふたたび紐解かれ、「なら学」が各地で花開くことを期待している。

（寺岡伸悟）



【16】『北満民俗スケッチ帳』第 1 冊目（左）と『シベリヤ日誌』稿本（右）。『北満民俗スケッチ帳』は、黒河省陸軍病院勤務時代のフィールドワークノートで、全 2 冊。スケッチのほか、写真や煙草函が貼付されている。『シベリヤ日誌』は五倍子雑筆 13 号として昭和 29 年 10 月刊行された。正誤用として使用していた刊本の末尾に、「正誤本により、この原稿の誤字を正し、なほ思ひつきし文句を各所に入れる作業を終る。窓外、小雨しと／＼ふる」と、昭和 30 年（1955）5 月 28 日付の書き入れがある。刊行後も自身の「記憶」を絶えず検証・更新していたようである。

画像出典

- 宝塚澤田家　No.3, 4, 7, 8, 14, 15, 16, 表紙
- 大阪大谷大学澤田文庫　No.1, 2, 5, 6, 10, 11, 12, 13
- 遠野市立博物館　No.9

貴重な史料の閲覧・撮影・掲載にご高配賜りましたこと、記して感謝申し上げます。なお、番号の振られていない図版は、すべて個人蔵である。

執筆者一覧

- 寺岡伸悟　奈良女子大学研究院人文科学系・教授、なら学研究会世話人
- 岩坂七雄　奈良市教育委員会文化財課主幹
- 山上　豊　奈良大学非常勤講師（元奈良県立図書館司書）
- 樽井由紀　奈良女子大学非常勤講師
- 磯部　敦　奈良女子大学研究院人文科学系・准教授

2017 年 7 月 1 日公開

編集・発行　奈良女子大学なら学研究会（世話人　寺岡伸悟）

〒630-8506　奈良市北魚屋西町

mail to　narastudies@gmail.com

website　なら学研究会（http://narastudies.hateblo.jp/）

website

- 本パンフレットは、2016 年度奈良女子大学研究推進プロジェクト「郷土史研究者の人的ネットワーク解明のための基礎研究—奈良県出身・澤田四郎作の旧蔵史料の調査と分析—」の成果の一つとして公開するものである。
- 上記ウェブサイトで『澤田四郎作年譜・著述等目録』を公開中である。ダウンロードして利用いただきたい。